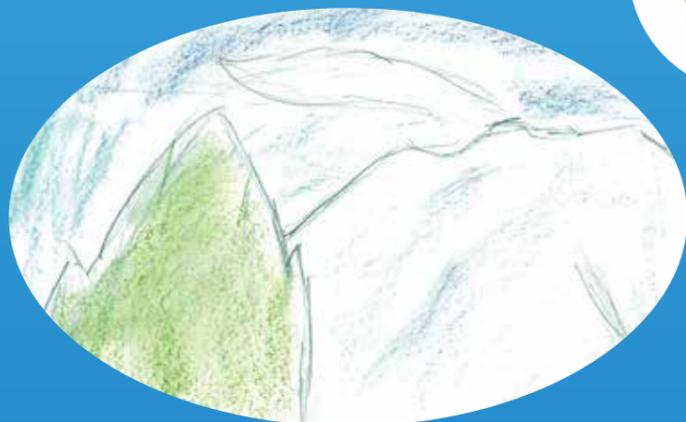
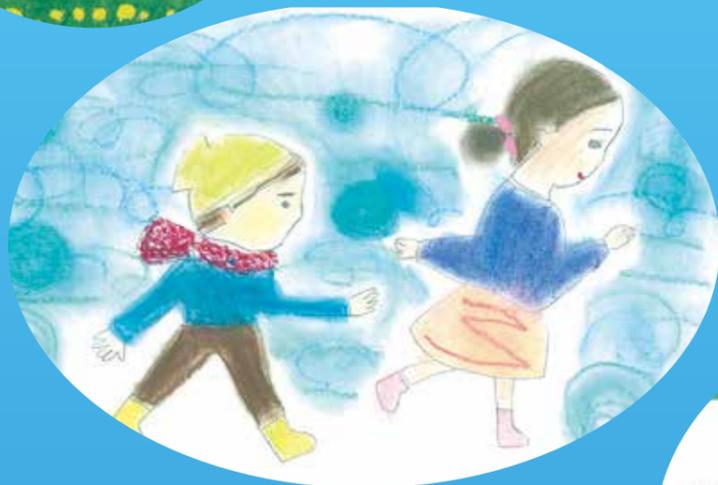


ぴとま

32
歳



みんなで描いた表紙スケッチは、12ページで特集しています！

アイヌ文化の祈りの大切さや装飾の意味、自然への畏れや尊敬、和人と交易と転用の見事さ、アイヌ刀を観察すると様々なことが見えてきました！



レオチン



企画展 **アイヌ刀**

—エムシ・タンナイコロ・タクナイコロ—
2022年4月29日[金] ▶ 6月26日[日]

平和を大切に
アイヌ民族

わたしは、エムシを見て、アイヌ民族はとても平和を大切にしていると思いました。理由は刀は、きるための物なのに、やくばらいに使っているからです。アイヌ民族のように、平和を大切にすることがふえるといいと思います。



エムシ
やくばらいのナイフ。アイヌ民族が使った刀。

イラスト
まえはら 前原 みのり



イラスト
たの さあや 田野 紗彩

刀はなんのために使ったの？

刀「エムシ」と宝「イコロ」

アイヌの人々は、刀を闘いでなく、儀礼に用いた。それが「エムシ」だ。刀身を取り払い、鞘・柄などに装飾を施した「タンナイコロ(長い宝)」、「タクナイコロ(短い宝)」がある。魔除けのために刀身は錆びている。

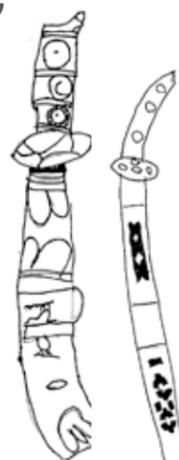


イラスト
たの かな 田野 菜穂

刀についての豆知識

刀身が錆びているわけ

アイヌ刀の刀身は、全体が錆びているのがほとんどで、その理由は、諸説ありますが、刀が光っていると、魔物はその光を見て、体をかわしてしまうなど、錆びた刀で切られた魔物は復活できないからだとされています。そのため、アイヌ刀はあえて研がずに錆びさせていたと考えられています。

イラスト
ひきち ゆめ 引地 優萌

副葬品としての役割も

今、使われている刀は何かを切ったり、戦う時に使う物だが、アイヌ刀は違う。悪ばらいや亡くなったあとに副葬品として用いられる。おはかにもいっしょにうめられた。このアイヌの刀は、おどりに使われていて、歌といっしょにふる。

イラスト
たの さあや 田野 紗彩

セツパはシトキにもなる

ぼくは、刀のことをかんさつしました。タンナイコロは、長い刀です。エムシは、たたかうときのちがってかみさまにのりをする刀です。エムシには、セツパというつばがあってそれがかちかちなってそれがかみさまにするのりです。セツパをひもといたらシトキになります。シトキは、くびかざりです。

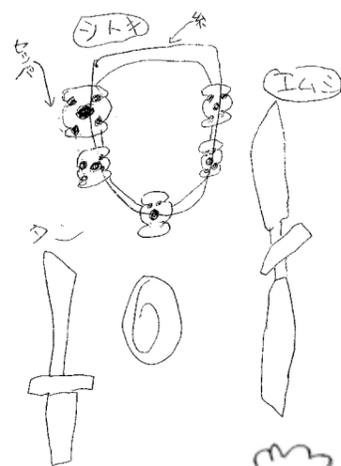


イラスト
おかもと いたる 岡本 到

刀をかんさつ
してみると...



イラスト
うえたけ ゆう 植竹 湧

色々ある刀の各部分の名前

ここには色々なアイヌの刀があった。だが一番びっくりしたのは刀のかくぶぶんの名前が色々あるところです。剣道の竹刀では、つか、つば、ともうすこししかありません。ところがアイヌの刀はセツパ(つば)、エムシ(刀)、エムシニピヒ(刀のつか)、ケブシペ(鞘) それいじょうあります。しかもつばには3つの型がありました。菊花型、木瓜型、丸、八角型です。

イラスト
うえたけ ゆう 植竹 湧

セツパはとりはずし
できる

エムシ(刀)がアイヌの人々だとやくばらいにつかわれているのだとびっくりしました。エムシにはがらがついて色がついているのもありました。エムシにはセツパというのがついています。セツパはもつぶぶんについているまるいものです。とりはずしできるとしり、おどろきました。

イラスト
まえはら かほ 前原 夏帆



イラスト
ひきち ゆめ 引地 優萌

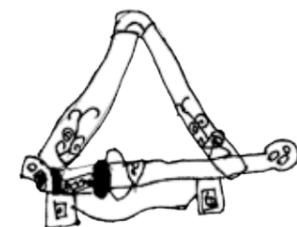


イラスト
たの こな 田野 心絆

イラスト
まえはら かほ 前原 夏帆



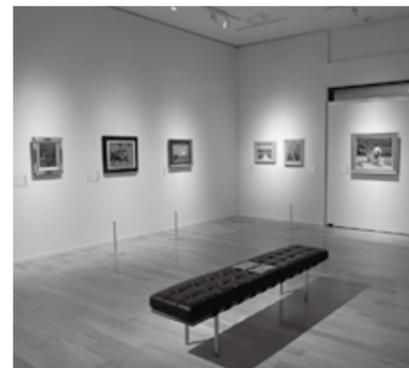
イラスト(丸型)
みうら ももは 三浦 百葉



イラスト(菊花型)
あべ たかこ 阿部 多香子

収蔵品展「動物の絵」

2022年4月29日[金] ▶ 6月26日[日]



絵にも色々な分野があるが、今回は動物を取り上げる。狐、馬、鳥等。特に馬は、引き締まった体、力強く競う姿、これには私もホれているが、絵も良い。作者の画風でも左右されるが、どれも特徴を捉えている美しいものばかり。尚更、どの絵も捨てがたいものだ。

イラスト
はらだ じゅんや 原田 詢矢

阿部 多香子 記者

中学1年の阿部多香子です。美術に興味があり、学校では美術部に所属しています。絵はかくことも見ることも大好きです。最近では



文時代のことが気になって、土器や土偶の本を読んだりしています。縄文時代に生まれてみたかったなあ。びとこまではイラストを頑張ります。よろしくお願いします!!

植竹 湧 記者

美園小学校6年1組の植竹湧です。のんびりしつつ月、水、金たまに土、日剣道をして、火、木は外で遊んで



じみにいそがしいまいにちをすごしています。びとこま2年目でことしいろいろな色々たのしみにしています。

岡本 到 記者

ぼくのなまえは、あかもといたるです。あさひかわからひっこしてきました。びとこまは1かい目です。

ぼくせいしょうがっこうの2年2くみです。ともだちがいっぱいほしいです。びとこまでイラストがいっぱいかきたいです。



みんなとなかよくなりたいです。

栗本 帆夏 記者

とまこまいしりつこうようちゅうがっこう 2年の栗本帆夏です。びとこまに参加して4年目なので、いままでの経験をいかして

たくさん作品を見て記事を書いていきたいです。そして今年、写真にも挑戦していきたいです。びとこまのリーダーとして1年間、みんなと楽しく活動していきたいです。よろしくお願いします!



栗本 百花 記者

私は、糸井小学校5年の栗本百花です。好きなアイドルグループは、ジャニーズの snow man です。好きな



ことは、友達と、しゃべることです。ドラマの話をしたりします。今年、文を中心にびとこまではがんばりたいです。よくしゃべったりしますが仲良くしてくれたらうれしいです。

田野 菜絆 記者

わたしはうんどうがすきです。りんごがすきです。いちごもすきです。びとこまのれおちんもめっちゃん



もだいすきです。びとこまでえをかくのがたのしみです。みんなといっしょにがんばります。

田野 心絆 記者

わたしはしぜんがすきです。いちばんすきなのははくぶつかんがすきです。いろいろしらべたいです。めいしづくりはたのしかったです。びとこまはじめてだけどがんばります。



田野 紗彩 記者

たくしんしょうがっこう 4年田野紗彩です。10才で4年目です。好きなことは読書で、好きな食べ物はフライドポテトです。学

校では放送いんをしています。習っていることは新体操と英会話です。目標は記事の量を多くすることです。イラストも上手にかけられるようにがんばりたいです。よろしくおねがいいたします。



野本 遥 記者

私は、白老中学校1年の野本遥です。読書と物作り、食べることが好きです。好きな食べ物は



こぼん、ピザ、お肉、アポロチョコです。得意なことはバイオリンです。びとこまでは、できるだけ文章とイラストの両方をかきたいです。中庭展示が好きなので、今年もたくさん取材をしたいと思います。

幅田 智樹 記者

ぼくは、宇宙が好きです。それから、絵をかくなら



風けいの絵をかくのが好きです。好きな食べ物はカレーライスです。びとこまでぼくがやりたいことは、いろいろな作品を見て感想を書いてみたいですね。楽しみにしていることは、ほかの人の感想も聞きながら見られることです。よろしくおねがいします!!

原田 詢矢 記者

びとこま4年目の中2、原田詢矢です! 青翔中学校の大所帯で培われたコミュニケーション力と文章力

で、副編集長の役割を全うしたいと思います。歴史が大好き、マイブームは競馬で、すごくマイペースな男です。書けない時と書ける時の差は激しいですが、1年間宜しくお願いします!



引地 優萌 記者

びとこまに参加するのは1回目の引地優萌です、苫小牧市立美園小4年生です。絵をかくのがとく

いなので、びとこまではイラストをかきたいです。いろいろな展示物を見て上手にかきたいです。



前原 夏帆 記者

わたしは前原夏帆、美園小3年生です。好きな食べものオムライス、すきなくだものバナナ、好きな色、水



色と赤、すきな豆腐、ハムスター、しゅみ絵をかくことです。はじめての、びとこまでですが文章も絵もじょうずにかけたいなと思います!

前原 みのり 記者

運動バリバリ小学5年生! 前原みのりです。勉強も



まああできます。勉強がかわって、中休みになると大変身! いっきにおもしろい人になっちゃいます。せが小さいのが特ちょうびとこまでは、苦手な絵にたくさんちょうせんしたいと思っています。よろしくおねがいします。

三浦 百葉 記者

私は、若草小学校6年の三浦百葉です。好きな遊びは、ドッ

子ボールとおにごっこが好きです。後、好きな教科は、体育と理科です。体育の好きなわけは、体を動かす事が好きだからです。そして、6年生でがんばりたいことは、国語の漢字と、社会の歴史を覚えることです。よろしくおねがいします。



森田 紗史 記者

分子がとくいな小学5年生! 学校では、学年3番

目にせが小さいけど、運動が大とくいで、さかだちあるきもとくだヨ。昨年のオンライン楽しかったから、またみんなでしたいな。よろしくね!



じ どうしゃほっかいどうかぶしきかいしゃそうぎょう しゅうねん き ねん じ ぎょうとくべつてん
トヨタ自動車北海道株式会社創業30周年記念事業特別展

げいじゅつ みやこ
『**芸術の都ウィーンと**
ちょうりゅう
デザインの潮流』



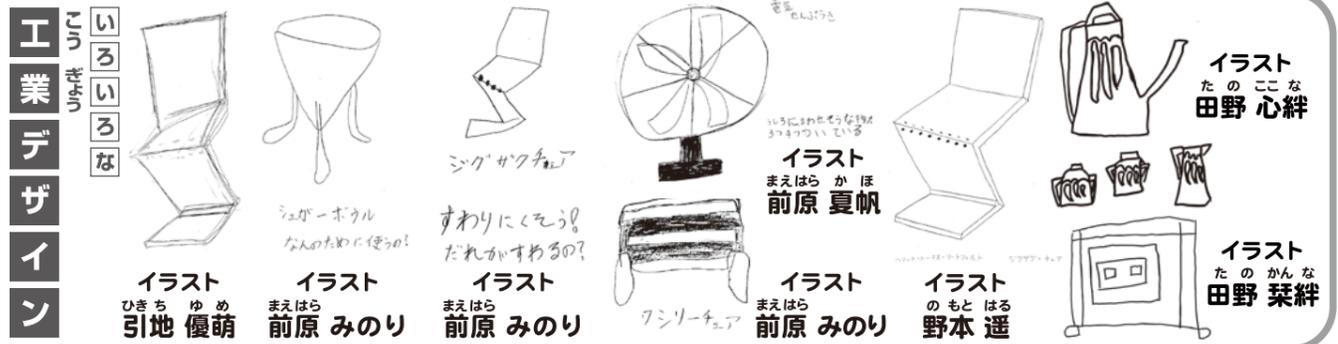
ねん あいちけん びじゅつかん そう 1905年 愛知県美術館 蔵
ねん がつ にち ど がつ にちにち
2022年7月16日[土] ▶ 8月28日[日]

人間の複雑な内面を表した絵画芸術と、複
雑さを取り払い洗練された工
業デザイン、100年程以前の
ヨーロッパ世界をじっくりの
ぞくような展覧会でした。



じんせい たたか おうこん きし
グスタフ・クリムト 《人生は戦いなり(黄金の騎士)》

1903年にえがかれ、アルブレヒト・デューラーがかいた《騎士と死と悪魔》という作品
ににた作品です。《騎士と死と悪魔》の作品は、騎士の後ろにはぶきみな人がいたり、
作品のはじめのほうには、人の頭のほねのような物があります。クリムトは中世以来の伝統的な「死を忘れ
るな」の主題を、極度に抽象化された、森のみどりをはい景に黄金の騎士が進んで行く場面に変えたそう
です。グスタフ・クリムトがかいた絵には、馬のおなかの下に人のかげのようなのがうつっていたり、ヘビ
の絵がえがかれていました。グスタフ・クリムトの騎士には、金ぱくがつかわれています。(栗本 百花)



《ステレオのぞき眼鏡》

ステレオのぞき眼鏡は、明治時代につくられ、レンズと木でつくられています。のぞきこむと和風のよう
な写真みたいで、人が二人でおどっているように見えました。人物がうつりこまれていたり、立体的にうつ
られていました。昔の世界観が、レンズの中を見ただけで感じられる作品だと私は思いました。(栗本 百花)

エゴン・シーレ

1917年《**カール・グリュンヴァルトの肖像**》

この作品は、自分が戦争に参加していたときの
上官をかいたそう。ななめ上からの角度で見た様子
で、浮世絵の影響を受けている。(野本 遥)

1918年《**座る少女：シュテファニー・グリュンヴァルト**》

絵を見ると一人の少女が描かれている。この少女は足が描かれ
ていない。けど、座っているように見える。少女は何か見てい
るように感じることもできるし、考えているようにも見える。こ
の作品はいろいろな見方や考え方ができる。(栗本 帆夏)

オスカー・ココシュカ

1914年《**絵筆を持つ自画像**》

《絵筆を持つ自画像》は、油絵で、筆の使い方
が独特だ。絵の裏には、ココシュカが、恋人にあ
てた「私はこの絵から見つめる。あなたは私を見
る。」という文が書かれているそう。(野本 遥) イラスト 田野 紗彩



ウィリアム・モリス

1883年《**いちご泥棒**》

たくさんのいちごと鳥がいる。全体的にみると、鳥がいちごを
狙っているように見える。このように見えることから「いちご泥棒」
というタイトルに結びつく。この作品は、木綿で作られていて、
まるで絵のようにこまかく作られている。(栗本 帆夏)

ペーター・ベーレンス

1909-1932年製造
《**電気湯沸かし器**》

このやかんを写真でとった理由
は、この1900年代のときにもこん
なかこうのぎじゅつがあったのに
おどろいたからです。また、この作
品について30代男せいの人に取材しました。「デザインが1900年代
のものなのに、ぜんぜん古いように見えないのがおもしろい」と
いってくれました。そして、この作品で注目するのがさしこみぐ
ちです。このときに電気があるのにおどろきました。(幅田 智樹)



豊田市美術館 蔵

節だらけでくぼみやおれ曲がるようなりんが
く線で描く手法は、シーレ独自のものだ。この
作品は、周りが暗い色なので、人がうき上がっ
ているように見える。グリュンヴァルトはシー
レのげいじゅつの良きりかい者で、とてもしん
らいしていたのではっきりとした色、「白」を目
立たせたのだと思う。(田野 紗彩)



日本と外国が学びあっている

こんかいのてんじのなかでも絵の
中に日本びじゅつもととりいれられて
いるそうです。日本人たちは外国
のデザインやかこうのぎじゅつをま
なんだそうです。おたがい学びあっ
ているのにあどろきました。(はばた ともき 幅田 智樹)

それぞれ特ちょうがある

わたしは、色んな絵を見てかく人
によって、かき方や、色の使い方がち
がうことに気づきました。それぞれの
特ちょうがあって、おもしろかつ
たです。(まえはら みのり)

ミース・ファンデル・ローエ

1929年《**ブルーノチェア**》

ブルーノチェアは、ブルーノ市に
あるチューゲンハット 邸のためにデ
ザインされたことがその呼び名の由
来となっていて、金ぞくパイプを用
いています。(引地 優萌)



壁画 芽の音 50年記念 マボロシ ニギハク

谷内六郎展 幻と現

谷内六郎の世界



2022年9月17日[土] ▶ 11月6日[日]

今回は、私がレイアウトさせて頂きました！画家・谷内六郎さんのたくさん作品を拝見させて頂きました。たくさん記事一つ一つが目立つようなレイアウトを考えるのが難しかったです。皆さんの協力のおかげで、記事を読んでも作品について知ってくれそうです！



イラスト 栗本 帆夏

非日常で憧れだった日常

イラスト 前原 みのり

氏の作品は、「特徴的」。この一言で充分事足りる。優しさやどこか感じる何気ない日常をその作風で収めている。その日常とは何か。例えば海辺を歩く、例えば吹雪に凍える、例えば蚊帳の中で寝る。時に牧場を、時に空を描く氏の作品はまるで盛大なクラシック音楽と言えよう。又はオペラか。氏の人生は病と共に歩んで来たものだ。肺炎で妹を亡くし、自身もぜんそくを患い、心不全により還暦を迎えず逝去した。そんな人生で、先程述べた「日常」は氏にとって「非日常」「憧れ」だったに違いない。作品は「日常」の一コマを写し、それを優しいタッチでまとめる。この上ないコンビネーションだろう。『週刊新潮』の表紙を飾ったのも、その魅力がある故だろう。氏の作品は、唯一無二の作風で、更にその作風は人々を引き付ける魅力をもっている。歴史の片隅で彩りを添えているのが、これらの作品なのだ。

たとえがすてき

絵を描くときに絵の具などもつかうけど、きってはったりしているのもいいとおもった。物の動きをたとえであらわして、すてきでした。たとえば『夕焼けを消す人』1959(昭和34)年の作品で夕やけは夜になるときえるから、それを人が消したというたとえにしている。

(幅田 智樹)

谷内さんの好きなもの

谷内六郎さんはたくさん作品がある中、特に牛乳や楽器、子どもなどが多く描かれている。私は、たくさん描かれているため、好きなものなのではないかと考えた。(栗本 帆夏)

アイヌの人がでてくる

こないだアイヌの展示があった。谷内六郎の作品にもアイヌの人たちがでてきたこと、谷内六郎が北海道におとずれたことにびっくりしました。

(幅田 智樹)



イラスト 田野 心絆

楽器や音がよく使われている

谷内さんの作品には、楽器や音がよく使われている。時にピアノが使われているものが多かったが、コントラバスやバイオリンが使われている作品もあった。昔の作品は、『湯気』ではやかんの湯気の音を汽車の走る音にたとえていたり、『すりばちの音』ではすりばちで大豆をすっている音を雷の音にたとえていた。谷内さんの作品は、全てとても豊かな発想のものが多くて、見ているだけで楽しくなった。

(野本 遥)

見ている人に取材すると…

見ている人の感想をききました。感想は、子どものころのことを思い出して、「子どもはたくさんのおもちゃをまだ知らないからいろいろなものをたくさんのおもちゃにしてみよう」と描いていると思う。と

(幅田 智樹)

海のテーマが多い！

谷内さんの作品を見て思ったことは、とにかく海をテーマにしている絵が多い！1番から20番までは全て海が入っていて、20以上の数でもよく海がでてきた。谷内さんは海が好きなのだろうと思いました。他にも牛乳、ピアノ、列車が出てくる作品も多かった。一番びっくりしたのは46番の北の果の年輪という作品にアイヌの人が魚をとっているのが書いてあったことです。しかも25年間も『週刊新潮』の表紙をつくり、つくった数は1,335枚ほどもあるそうです。

(植竹 湧)



イラスト 阿部 多香子

絵にさまざまな工夫

谷内六郎さんによる『週刊新潮』の表紙は1956年の創刊当時から描かれているそうだ。絵には様々な工夫がされていて、原画の中には砂利道や土堀の部分に、本物の石や砂が使われていたり、草むらや茅葺き屋根を表すために、絵の具に筆の毛をまぜているものもある。今回の展示でも『舟が編むレース』という作品にレースが使われていたり、石などが使われている作品も展示していた。(野本 遥)



今回は様々な主観で様々な作品を見てみました。びとこま記者達の感じたままを書きおろし、おすすめのをまとめてみました。半世紀以上前のものですが、素晴らしい作品ばかりです。是非ご覧ください。

びとこま クローズアップ 注目した作品

イラスト 栗本 百花 題字 植竹 湧・前原みのり

1951年《月の海辺》
私は、月の海辺を見て、海のおくには船のようなものがありました。浜辺がピアノになっていました。雲が空にたくさんあり、てまえには草のような大きなさふさがありました。タイトルには《月の海辺》と書いてあったけど、作品を見ると月の絵がなかったの、どれが月なのか考えさせられる作品でした。
イラスト 栗本 百花

1951年《波のピアノ》 個人蔵
作品を見て、ぼくは海岸と波のあいだにあるピアノのけんばんをひいたらどんな音がするのか、もしも絵の中に入れてみたい。たぶん、波の音はそのときそのときによってちがうから、いろいろな波の音がすると思う。
イラスト 前原 みのり

なみがピアノをひいているみたいできいてみたい。
イラスト 塩川 野之助

1957年《海のサイダー》
谷内六郎さんは、まわりのけしきや、物の動きが、「自分にはこう見える」と教えてくれる絵をたくさん描いていると感じた。特に《海のサイダー》という絵は、家と家の間にある。海がサイダーに見えることを表している。とてもおもしろい作品がたくさんあると感じた。
イラスト 前原 みのり

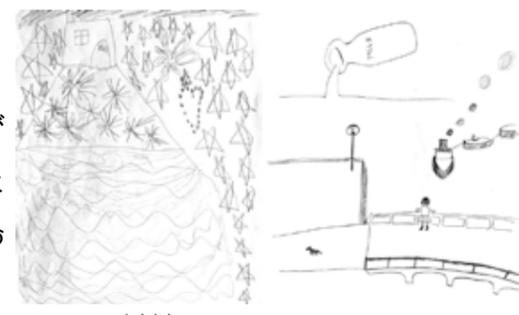
たしかに家のあいだに海、ふね、白い丸とぼうがあってサイダーみたい。だからってみたい。
イラスト 塩川 野之助

私が気に入った作品は、《霧のミルクも来てた》と《ひき潮の忘れ物》と《海のサイダー》だ。《霧のミルクも来てた》は、朝、戸をあけるとミルクが来ていて、霧のミルクも来たという様子をかいた絵だ。ふんわりした色で、とてもかわいい絵だった。《ひき潮の忘れ物》は、ひき潮がクラゲの子を忘れていって、それを子どもが見ている様子をえがいた絵だ。現実ではありえないことだが、絵の世界では、想像したら、とても楽しそうだった。《海のサイダー》は、家と家との間に見える海をサイダーにたとえていて、発想がとても気に入った。
イラスト 野本 遥



原田 詢矢
イラスト 前原 みのり

1959年《朝》
朝に牛にゆうをのむ人が多いから牛にゆうにしたと思う。その色もにておもしろい。
イラスト 塩川 野之助



1959年《雪の宇宙人》
雪がほんとに宇宙人になってる。たいぐんをみてみたい。
イラスト 塩川 野之助



1964年《波のケシゴム》
この絵は、浜で女の子たちがかいた絵を、波が消してしまっている様子がかかっている。女の子たちが少し悲しそうな顔をしているのが想像できる。谷内六郎さんの絵と題の関係を想像すると、色々なストーリーがうかぶ。
イラスト 前原 夏帆



1964年《すりばちの音》
おとこのことおんなのことがおかしができあがるのをまっています。すりばちの音がゴロゴロいうのはかみなりさんがいたんだね。
イラスト 田野 菜絆



1967年《みかん》
この絵は、女性が障子をはっている様子がかかっている。が、一人の男の子がせっかくはった障子をやぶって、みかんをわたそうとしている。女性ははんぶんこまわって、はんぶん「かわいいな」と思っているのかも知れない。
イラスト 田野 紗彩



1968年《雪野のファスナー》
雪の上の線がファスナーみたいでおもしろい。世界のためのジャケットみたい。電車もファスナーみたい。
イラスト 塩川 野之助

イラスト 塩川 野之助

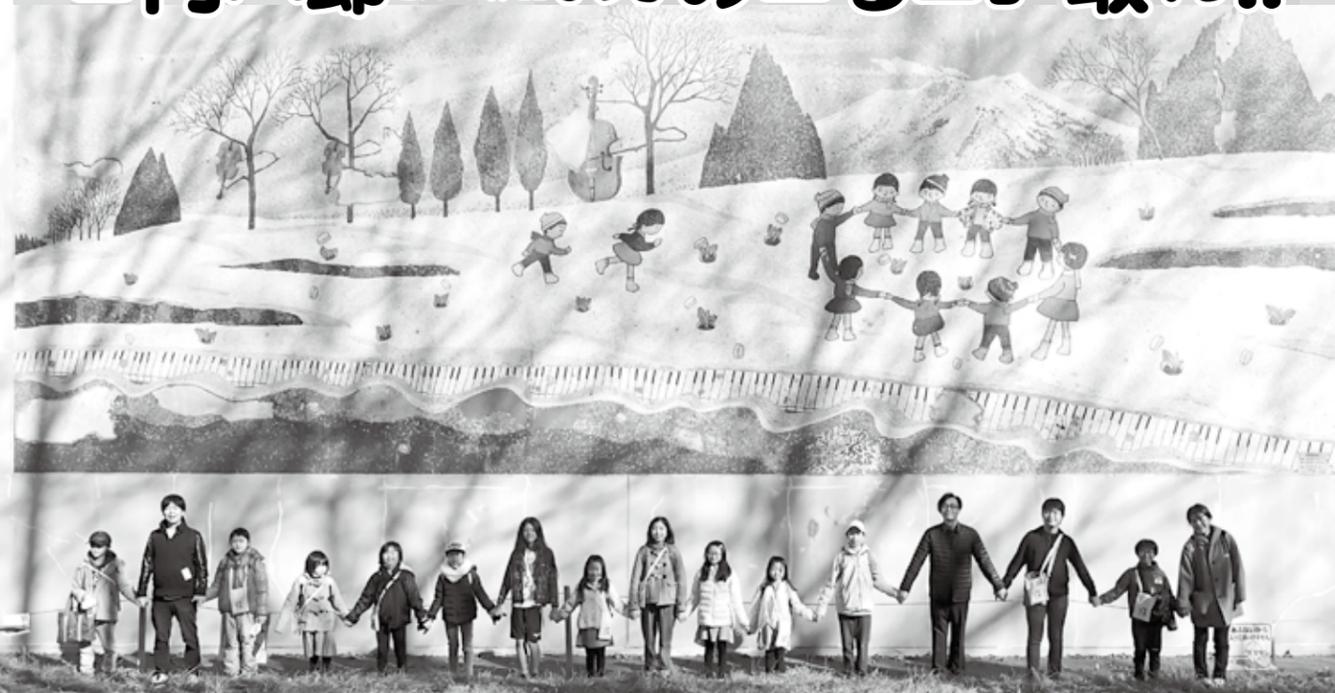
1974年《小川の音》
女の子が川沿いであそんでいるように見える。だけれどこの小川の音は小人が木琴やたいこなどの楽器を使って奏でていておもしろい作品だと思う。
イラスト 栗本 帆夏

1975年《枯葉は昔のあそびをしている》
この作品はタイトルのように、枯葉たちが昔のあそび「かごめかごめ」をしている。風によってあそんでいる姿はとてもかわいらしい作品だが、おもしろい。
イラスト 栗本 帆夏

次回は、科学センターで壁画取材します！
※P10-11記事内の作品の明記のないものは、全て横須賀美術館蔵です。



たに うち ろく ろう
谷内六郎さんの作品『芽の音』を取材!!



今年(ことし)の野外活動(やがいかつどう)は、少し道草(みちくさ)したり、お話し(お話し)しながら歩いてお出かけ(お出かけ)し、着(き)てすぐ思い思い(おもいおもい)の解釈(かいしゃく)をした。壁画(かべが)の大きさ(おほいさ)を体感(たいかん)しました!



ねん がつ にちど かつどう やがいかつどう あこば ぜんかい かつどう とく
2022年11月19日(土)の活動は、野外活動を行ないました。前回の活動では特
べつてん たにうちろくろう さくひん しゅざい びいん こんかい とまこまいし ががく
別展で谷内六郎さんの作品を取材した部員たち。今回は、苦小牧市科学センター
へきが めで おと しゅざい で へきが かんさつ ぶんしゅう
へ壁画《芽の音》を取材しに出かけました。壁画を観察し、文章やスケッチ
ひょうげん へんしゅうぶ
に表現しました! (編集部)

フィフティース
50th タイル ~ 苦都の記憶 ~

11月も中旬。肌寒(かみ)くなってくるが、このタイル画(たいるが)は50年(ごじゅうねん)も越えた(こ)のかと思う(おも)と感
嘆(たん)する。

苦小牧市(ことまき)の科学センター(かがくセンター)。この壁(かべ)には一面(いちめん)を使って(つか)作(つく)られた絵(え)がある。先(せん)日本紙(にっぽんし)
でも取り上げ(と)り上げた谷内六郎(たにうちろくろう)の原画(げんが)を基(もと)に、タイル(たいる)を貼(は)ってつ(つく)られたもの(もの)だ。しかし、
昔(むかし)の人は50年(ごじゅうねん)も保(たも)つと思(おも)っていた(おも)っただろうか。普通(ふつう)は、崩(くず)れても全(ぜん)く不思議(ふしぎ)はな
い年数(ねんすう)だからだ。しかし、一部(いちぶ)が禿(は)げるだけ(だけ)に留(とど)まっているのは、市民(しみん)や六郎(ろくろう)自身(じしん)
の想(おも)いが伝(つた)わったから(から)だろうか。若(わか)しくは、懸命(けんめい)な保(たも)全(ぜん)作業(さぎょう)の為(ため)か。

作品(さくひん)は、氏(し)の特(とく)徴(てい)的(てき)なその風(ふう)景(けい)や作(さく)風(ふう)が有(あ)りなが(なが)ら、タイル(たいる)の織(お)細(こ)な色(いろ)選(えら)びによ(よ)っ
て作(つく)り上げ(あ)げられて(お)いる。遠(とほ)くから眺(なが)めれば、タイル画(たいるが)には見(み)え難(がた)い。長(なが)年(ねん)の風(ふう)雨(う)に
さらされ(さら)ながらも、禿(は)げた部(ぶ)分(ぶん)以(も)外(がい)、老(おい)いの見(み)えな(な)いよ(よ)うな作(さく)品(ひん)だ。

物(もの)には寿(じゆ)命(めい)が有(あ)る。しかし、愛(あい)され(ら)れたその記(き)憶(おく)は、実(じつ)績(せき)とし(して)ての記(き)録(ろく)に消(き)えるこ
と(こと)はな(な)い。絵(え)が長(なが)く市(し)民(みん)を見(み)守(まも)っ(て)くれるこ(こと)。思(おも)い出(で)が永(なが)く残(のこ)っ(て)くれるこ(こと)を
願(ねが)っている。(原田(はらだ)詢(じゆん)矢(や))



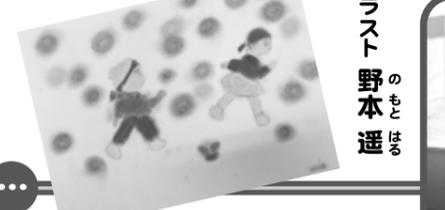
びじゅつはくぶつかん ががく
美術博物館(びじゅつはくぶつかん)から、科学センター(かがくセンター)ま
で、みんな(みんな)で歩(ある)きなが(なが)ら向(む)かっ(た)
よ。肌(はだ)寒(さむ)いけれど、太(たい)陽(よう)がで(で)てい
て気(き)持(も)ちのい(い)い秋(あき)のお散(さん)歩(ぽ)です。



おも おも
さあ、思(おも)い思(おも)いに
さくひん なが
作(さく)品(ひん)を眺(なが)めよう!



いろえんぴつ し
パステル(いろえんぴつ)、色鉛筆(いろえんぴつ)、ペン(ペン)など、自
由(ゆう)な画(が)材(ざい)を選(えら)んで色(いろ)を付(つ)けまし(ま)した。
みだま(みだま)まそのま(ま)ではな(な)く、自(じ)分(ぶん)
が感(かん)じた色(いろ)や風(ふう)合(あ)いにし(して)いくの
は楽(たの)しいね!



しゅ ざい こ
取(と)材(ざい)後(ご)は...
えが
みんな(みんな)で描(え)いたス(す)ケッチ(ち)は、美(び)術(じゆつ)博(はく)物(ぶつ)館(かん)のロ(ロ)ビー
にて展(てん)示(じ)して(して)いま(いま)す! ぜひ(ぜひ)ご覧(らん)くだ(くだ)さい!



たの ここな
イラスト 田(た)野(の)心(しん)絆(絆)



みんな(みんな)上手(じょうず)にス(す)ケ
ッチ(ち)して(して)いま(いま)るね!!

あみか一大博覧会2022

今回の博覧会は4つのセクションに分かれています。

最初はちょっと変わった面白い資料です。ゆで卵器や
ハエとり器などがあります。つぎは重要・貴重・大切

な資料があります。昔の電話や昔の苦小牧のえなどが
ありました。動物がずらりとならんでいるのは学芸員あ

気に入りの資料です。ほかにも屏風などがあります。最後は **イラスト 三浦 百葉**

エピソードのある資料です。第一洋食店のミートコロックスサンプルや海沿いで見

つかったクジラの骨など長い物がたりのある今と昔の苦小牧の物があります。ほ

くはこの博覧会を見ており学芸員さんは昔の苦小牧について知ってもらいたくて

このような物を出したのではないかと思います。 **イラスト 植竹 湧**



ちょっと変わった(面白い)資料

ゆで卵器(1967年製) 1955年に販売された、日本初の電

気炊飯器の技術を応用して作られたそうだ。ゆで加減は、

かたい・中・やわらかい、の3段階で調整でき、小さいの

に5個までゆでることができるのでおどろいた。 **(野本 遥)**



イラスト 野本 遥

初公開の資料

福井正治「サーカスの祭り」 この作品はカラフルな色づかいでにぎ

やかな様子が伝わってくる。よく見ると、たくさんの観客やバイオリン

をひいている人、空中ブランコをしている人がいた。絵の具に石こうを

まぜて色をぬっているようで、独特な質感になっていた。 **(野本 遥)**



イラスト 福田 智樹

学芸員お気に入りの資料

坂東史樹さんの苦小牧もけい作品はとてもこまかくてびっく

りしました。入って左の作品はフェリーにトラックがにもつを

つんでいるのを表した作品です。この作品でおどろいたのは道

にのっている雪の上を通ったトラックのあとがあるのと、船の

名前「北王丸」も読みとれるところです。中央の作品でびっくり

したのは自動はんばいきまでこまかく作ってあるところです。

入って右の作品は夜明けの苦小牧を表しており王子製紙のえんとつから出るけおりまでわたで表して

いるところがびっくりしました。よくみたら白鳥アリーナなどがありさらにおどろきました。 **(植竹 湧)**

イラスト 福田 智樹



Shochun

大博覧会とタイトルがついたからには本
当に様々な資料がずらーっと並んでいま
した。よく観ていくと苦小
牧がどうしてこうなるのか
が解って面白いです。



遠藤ミマンは、自身のコレクションをこの美術博物館が博物館であった時代に寄
贈した。本人と交流のあった画家や彫刻家の作品、海外画家の作品など様々な作品

がある。

その中でも印象的だったのが、秋山祐徳太子の「皇帝」という、ブリキでできた
作品。からだの中心についた1つの突起は何を意味しているのだろう。 **(阿部 多香子)**

イラスト 阿部 多香子

タガメのひょうぼんがあって、2ひきしかみつかってないそう。ぬまのはたはもともとぬまで、タ
ガメはぬまがすきななのでおかしはいたみたいだけど、いまはもうかいたくされて、たてもものなどがたっ
たのでもういないらしい。 **(福田 智樹)**

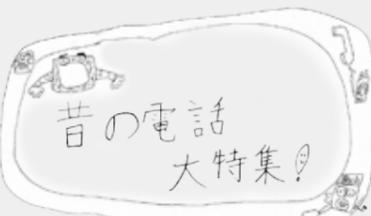


イラスト 岡本 到 題字 前原 みのり

電話は、アメリカ人のグラハム・ベルが明治9年に発明しました。

日本に電話が登場したのは明治23年でした。電話には、色々な特徴

があり、今の電話とちがいます。昭和8年には今の電話に近い「黒電話」

とよばれる卓上電話機がで、中央の大きなダイヤルや黒色のデザイ

ンが特徴的です。当時の電話は、お金がかかったそうです。 **(引地 優萌)**

昔の電話は、直せつ、相手に電話できずこうかん手とよばれる人が、相手につなげるやり方でした。

今の電話は、すぐつながるから少しふべんだと思いました。

前原 みのり



イラスト 森田 紗史



イラスト 引地 優萌



イラスト 野本 遥



イラスト 前原 夏帆

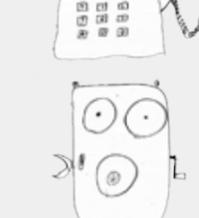


イラスト 前原 みのり



イラスト 引地 優萌



イラスト 岡本 到

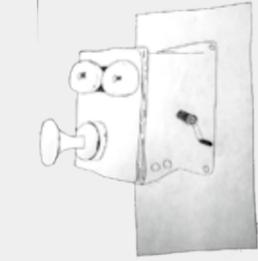


イラスト 三浦 百葉

このえをかいたりゆうは、見たことがないこうしゅうでん
わだったからです。この、こうしゅうでんわは、いまのこう
しゅうでんわとちがってダイヤルでやるやつです。110と119
をよぶときは、返却口のひだりにあるボタンみたいのをわっ
てその中のボタンをおしてつかうそうです。いちどに60円ま
でいれます。ほくもかけてみたいです。 **(岡本 到)**

トンボの標本を作る時、トンボの体をアセトンという薬品に入れるそうです。
理由はアセトンという薬は、体の油を落とす役目があるからです。標本にする
時は十分に体をかわがしてからはりどめて標本にするそうです。 **(引地 優萌)**

資料収集活動

せい たん ねん
生誕100年記念

2023
1/28(土)▷
3/12(日)

の と ま さ と し
能登 正智さん

の と ま さ と し
能登 正智 展

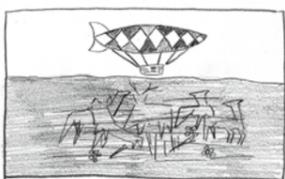


イラスト 野本 遥



イラスト 田野 紗彩

あお かぜ
青い風を見つけて

せい き こ の と ま さ と し せい たん しゅうねん
世紀を越える～能登正智生誕100周年～

—ウルトラマリンブルー—これは氏が多用した、深みのある濃い藍色といった感じの色である。世界が闇に包まれているような作風だが、悲壮とか哀愁とかの類の闇ではないと思う。そのイメージを生み出すのは、作品の秀逸さからだろう。氏の作品は言葉に言い表せぬ良さがある。日本語の表現力でも足りない。

最もその感覚に近いのは「幻想的」ではあるが、それだけではない。北の大地と氏の幻想・空想が自然と溶け込んだこれらの作品は、油彩、版画、ガラス絵にて表される。この3つの使い分けが上手い故にこれらの作品はより記憶に刻み込まれるのだろう。

昔のものがテーマの作品が多いが、故に現代にはない豊かさを感じさせる作品である。氏の作品は、冷たい色に反して暖かい作品だと感じた。(原田 詢矢)

生誕100年を迎えた能登正智さんの展覧会を取材しました。油彩画、ガラス絵、木版画作品をじっくり鑑賞。魅力たっぷりのイラストと文章で、能登さんワールドをぜひお楽しみください！



あべ たかこ
阿部 多香子

能登さんの作品は、青色が多くつかわれている。ウルトラマリンブルーの絵の具をよく使っていたそうだ。確かに、青色が多いが、近づいてよく見ると、赤や緑、ピンクをとところどころに使っている作品もあった。



イラスト 田野 葉絆

能登さんの色

能登正智といえば青。ウルトラマリンブルーという、濃い紫みの青をよく使っていた。青で満たされた展覧会の中で目立っていたのはピンク色が多く使われた作品。しかし、その作品にも、ピンク色から削りだされたように青が使われていた。なぜこんなに能登正智の作品には青が多いのだろう。(阿部多香子)

130点もある
たくさんの
絵



イラスト 田野 葉絆

能登正智さんの作品には、苦小牧の自然を描いた作品が多い。特に樽前山のけしきの作品がある。

中には、アイヌ文化を版画でうつした作品もある。題名がアイヌ語の作品、アイヌのカムイ(神様)の名前、すがたを版画にした作品もあった。

カムイのすがたを特ちょう的にうつしてあり、能登さんの想像力や表現はすごいと思った。

また、能登さんは作品を130点ほどえがいており、その中には、版画の絵本もある。(引地 優萌)

特徴的な系会
能登正智



イラスト
前原 みのり

さんがかくひとは、手や足が細かくかいていない。顔がかいていないのが少しこわくも見える。

イラスト
前原 みのり

「オリオン」これはガラス絵だ。ガラス絵というのは、額のガラスに絵をかくていくものだ。この作品は絵をけずり、その後ろからアルミ箔をつけた作品だ。星座がうきでているように見えて、とても美しい。お気に入りの作品だ。(田野 紗彩)

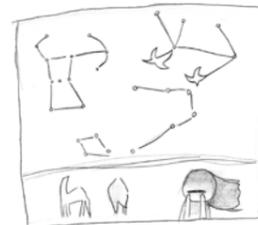


イラスト 田野 紗彩

ガラス絵

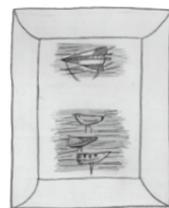


イラスト 野本 遥

透明なガラスの裏面に絵の具をのせて描く技法。これは、13世紀から14世紀のヨーロッパで生まれたとされているそうだ。日本でも、19世紀前後には、制作されている。能登さんの作品にも、ガラス絵ならではの工夫がこらされている。(野本 遥)

《アジサイ》あじさいは、あざやかな色なのに、暗い色でえがかれていて、さみしいようなふんいきに感じる。上にえがかれている鳥は、羽毛のふんわりした感触が伝わってくるようなけずり方をしているという。(野本 遥)

目立つアイヌの人たちの絵

《コタン コル カムイ》という作品には、2つのしゅるいがある。その2つの絵は、油絵とガラス絵の物が、両方にフクロウがえがかれていた。これには、何か関係があるのが気になった。(前原 みのり)

能登正智さんの木版

能登さんの木版は苦小牧の自然をいかした作品が様々あり、角度や季節などが違った樽前山や支笏湖が作品となっている。また木目をいかした作品が多くある。(栗本 帆夏)



イラスト 田野 葉絆



イラスト 田野 心絆

子ッソウ

倒れている木や流れている川がともリアルで、想像して絵をみると動き出しそうで、とても良かったです。(三浦 百葉)



イラスト 田野 葉絆

山の絵

私は、《モンブラン》という作品を見て、たくさんの家がえがかれているなと思いました。家をかくのにも工夫されているなと思いました。下からだんだんあかるくなっていて、すごくきれいでした。(栗本 百花)

「カナディアンロッキー」この作品は、能登さんが1969年にカナダに渡航した時にいったロッキー山脈のロブソン山の作品。この作品は筆の動かし方や少し赤や黄色が入っていることでロブソン山の迫力や力強さが伝わってきます。能登さんもこの山を見たとき今ほくがこの作品を見てわかる迫力や力強さを感じて描こうと思ったのだと思います。(植竹 湧)

2022年度のびとまは、スペシャル企画として『日本製紙グループの森と紙のなかよしがっこオンライン』やウトナイ湖野生鳥獣保護センターでの『昆虫採集と標本づくり』にも参加しました。

森と紙のなかよし学校

オンライン

2022年7月31日



木が紙になるとは思いませんでした。紙をつくる工場は、すごく大きかったです。また森や紙のお話を聞きたいです。
 田野 心絆

すごい紙『シールドプラス』

シールドプラスという紙がすごかった。この紙は、におい、酸素を通さないというのがすごかったです。じっさいにシールドプラスでできたふくろの中にガムが入っていたけど、ふくろをあけるまで、においがまったくしませんでした。
 幅田 智樹

木のチップから紙ができる。

木のチップとは木をこまかくしたものだ。

チップにするための木は森からきってくる。

木をきったら、またうえて木ができる。
 岡本 到

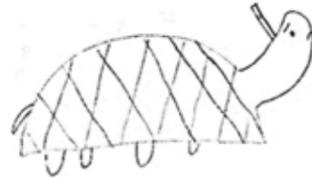
一時間目は森について、二時間目は紙についてのお話でした。紙は木からつくられていると知りませんでした。紙を大切に使おうと思いました。こんどは森に行ってみたいです。
 田野 葉絆

森と紙の関わりがわかりやすかった。森と木は人間にとってすごく大事なものだとして、これから、森を大切にしたいです。それに、一年間に海洋プラスチックゴミは800万トン（およそジェット機5万機分）の量が出ているそうです。このゴミを減らすために紙を使うことができます。そして、いまプラスチックのものが、紙に変わってきているので、身のまわりをよく見てみてください。
 幅田 智樹

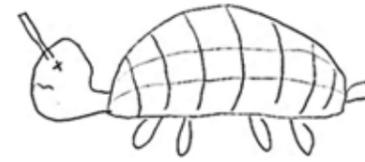


教材ボックスには、読みものや紙ぶくろが入っていました。開けてはいけないうろも入っていて、どきどきしました。なかよし学校が楽しみになりました。
 田野 葉絆

とても印象に残った『ストローがささったカメ』の話



海におちているゴミ、ストローがささってしまったようです。そのカメのことが世界のいろんなところに広がり、『ストローはプラスチックでなく紙にしよう』という店などがふえてきています。
 前原 夏帆



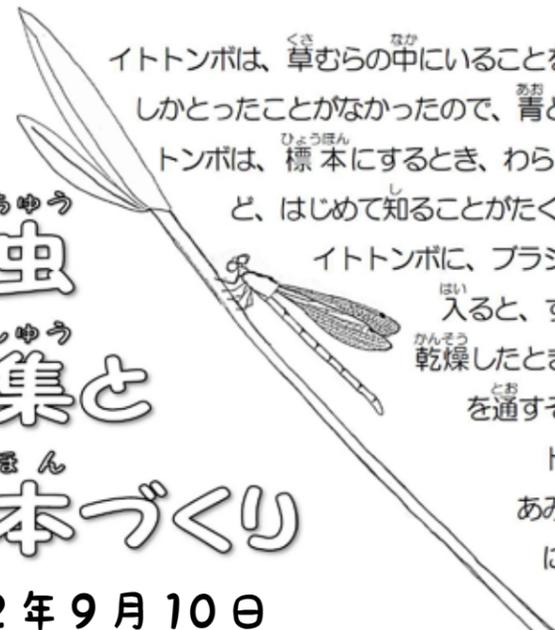
人間のせいで、なにも悪くないカメがひがいにあうなんて、かわいそうだと思った。わたしも、ストローを使うので、しよりに気をつけて、みんながくらせるための努力をしたいです。
 前原 みどり

森を守るために紙を大事に使おう

オンライン授業で、紙は木からできているということを知りました。その木は、森からきってくる。木がへったら、動物のいばしょがなくなったり、食べものがなくなるから、また木をうえる。大雨がふったら、木がきゅうしゅうしてくれるけど、うえないで、そのままだったら、土しゃくずれがおきるから、うえる。木をきったら、またうえて、森を守る。だから、森を守るために紙を大事に使おうと思う。
 岡本 到

昆虫採集と標本づくり

2022年9月10日



イトトンボは、草むらの中のことをはじめて知った。私は、アキアカネなどのトンボしかとったことがなかったので、青と緑のイトトンボがとれて、とてもうれしかった。トンボは、標本にするとき、わらを通すこと、三角紙には生きたまま入れることなど、はじめて知ることがたくさんあった。

イトトンボに、ブラシの毛を通すのが難しかったが、頭の付け根にうまく入ると、すっ~とした感覚だった。トンボが標本になって、乾燥したとき、折れてしまうのを防ぐために、わらやブラシの毛を通すそうだ。

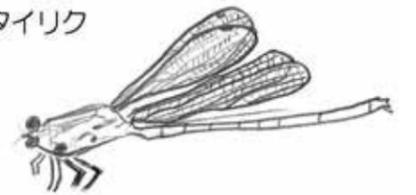
トンボは視野が広いので、つかまえるときは後ろからあみを近づけるといふアドバイスが勉強になった。次にトンボをとるときは、オニヤンマなどの迫力のあるものを標本にしてみたい。野本 遥



イトトンボの体がすごくほそくてびっくりしました。イトトンボは水面に多くてつかまえるのがむずかしかったです。

アセトンという薬をつかって油をぬくとき、ぬくまえははらの部分がかたかったのに、アセトンをつかったあとは空っぽでびっくりしました。つまり、トンボのはらの中は油ばかりみたいです。なぜこんなにウトナイ湖に自然があるのかというしっただから、水がどれくらいあるのかによってかんきょうがかわると、生えてくる植物がかわって、そこにすむ虫もかわるからだそうです。

よく赤トンボと言っているトンボにもアキアカネ、ナツアカネ、ムツアカネ、タイリクアキアカネと色々な種類があります。タイリクアキアカネはひじょうにめずらしいですが、アキアカネやナツアカネは見つけられるので、さがしてみてください。
 幅田 智樹



編集後記

1ページ、1文、1文字ずつ、じっくり記事を読んでみてください。見出しにもイラストにも、私たちの思いがつまっています。部活でも、習い事でもなく、好きなことや得意なことを楽しむために集まった、びとこま記者ひとりひとりの個性が紙面の魅力と

なっているはず。イラストが多いページ、文章が多いページ、取材を行い、目で見て、頭で考え、からだ全身で感じとったことをみなさんにこれからもお届けしていきます。(阿部多香子)

今回の令和4年度のびとこまでは、たくさんの作品に出会えた1年だったと思う。最初のびとこまはびとこまメンバーに会い、一緒にアイヌについて知り、谷内六郎さんの作品を見たり毎回みんなを知り、いきながらも作品について深く考えたりすることができたと思う。このびとこまでみんな文章を書く力、実際の作品を見てイラストを描く力が高まったと私は思う。高めた知識や表現を他の場面でもいかしていきたい。(栗本帆夏)

殆ど五六年…びとこま活動に私が参加して来た年月である。模索を続け、様々新しい事を始め、進化を続けて来た。優秀な記者に恵まれ、記事やイラストにも恵まれ、嬉しい悩みをよく抱えた。不安定な状況に翻弄されるときも、思うように筆が進まぬ時も在った。そんなときでも、みんなが頑張ってくれてびとこまも32号である。読者の皆様、美術館関係者の皆様の応援あって、支援あって続いて来た。感謝を忘れず、この完成を喜びたい。(原田詢矢)

私は函館からオンラインでびとこまに参加している。直接ふれられない作品も、記者が取材したことをオンラインで紹介してくれるし、記事も読めるので2倍楽しめる。また記者たちがやりたいことをドンドン実行する姿を遠いけど近いところから見守れるのも楽しい。(千葉和魂)

びとこま 第32号 (2023年3月発行)

【執筆】子ども広報部「びとこま」(阿部多香子、植竹湧、岡本到、栗本帆夏、栗本百花、田野栞絆、田野心絆、田野紗彩、野本遥、幅田智樹、原田詢矢、引地優萌、前原夏帆、前原みのり、三浦百葉、森田紗史、苫小牧市美術館、NPO 法人樽前 arty プラス)

【イラスト】子ども広報部「びとこま」

【紙面デザイン】堀米和克 (NPO 法人樽前 arty プラス)

【表紙・目次・編集後記】子ども広報部「びとこま」

【編集】子ども広報部「びとこま」

【発行】苫小牧市美術館 (北海道苫小牧市末広町3丁目9-7)